

2. 第六回 懇親会（2007.07.28）

開会に先立って（坪井 孝光）

お忙しい所多数お集まりいただき、誠に有難う御座います。今年の幹事役は小野さん、鈴木さん、それに私坪井でございます。今回の懇親会は鈴木威一さんのご好意により、銀座の「交詢社」という立派なところで開催できることになりました。また、「会報第10号記念号」にご寄稿いただいた平賀さんと岡本さんにもこの懇親会にご参加いただいております。後ほど自己紹介などを含め、ご挨拶していただくことにしております。

それとは別に、会員の伊藤さんのご自宅が火災に遭われ、今井先生のご発案により皆様から募金をいただきました。その募金は先日伊藤様へお送りさせていただきました。今回万難を排し懇親会にその伊藤さんがご参加いただいておりますので開催に先立ち、伊藤さんの方から一言お願いいたします。

伊藤 恭弘 様：

大変多勢の方々からお見舞いをいただき、ありがとうございます。火災の原因は全然分からない状況です。皆様からいろいろと激励のお言葉をいただき、大変ありがとうございます。

1) 今井先生 による開会のご挨拶

平賀さん、岡本さん、わざわざお越し頂き有難うございます。

お二人の来賓の方へ「この会」のご紹介ということで、この会の“生い立ち”というようなことを初めにお話させて頂きたいと思っております。先ず、何よりも、この会は他の種々の会合と異なり、かなり異質な性格を持った会ではないかと思っております。卒業研究生を通研の私のグループに受け入れたのは、昭和31年からです。それから毎年連続的に受け入れが続き、昭和41年までの11年間、卒研として一年足らずですが、30余名の方が私のところに来てくれたのです。

この会が発足したのは今から5年半前で、ここに居られる倉本敏雄さんが、3ヵ月半という驚くべき速さで、約40数年も昔の11年間にわたる卒研生全員の名簿を完成してくれたのです。倉本さんは卒業後、大阪の松下電器に入社されました。

平成14年の年賀状に“できたら通研での卒研生名簿を作りたいね！”と書いたのがきっかけで、7割くらいの方とは私との間に年賀状のやり取りがありましたので、残り3割ぐらいの方の住所を倉本さんが熱心に探し出してくれたわけです。

名前と卒研テーマを全部纏めてくれました。後日、2名の訂正はありましたが、約半世紀近く経た時点でのこの名簿の完備が平成14年の4月頃のことでした。この年の7月に第一回懇親会を開催し、その後毎年この時期に懇親会を開催することになった訳です。

今までは三鷹通研「華迎」で会合を行ってきましたが、今回は異例のこととしてネクタイ着用の格式の高い銀座「交詢社」での開催となり、さらにまた会員外お二方の参加、となった次第です。『会報第10号記念号』に寄稿頂いた藤本正友さんは先約があってお出でになれませんでした。平賀貞太郎さんと、岡本紘さんお二人のご参加を頂くことができ、大変嬉しく思っています。

ここ「交詢社」はなかなか利用できないところらしく、幹事の鈴木威一さんが、ここ交詢社の会員で、半年以上前から、出席人数をある程度以上確保するなどして今日の会に備えてくれました。また、その人数にふさわしい会場を選択するなど、いろいろ努力して頂き、お蔭様でこのように立派な会場を本日使わせて頂けた訳です。鈴木さんには改めてお礼申し上げたいと思います。

この会は、2002年7月に第一回懇親会を開催し丸5年が過ぎ、6年目に入りました。ここで、ちょっと坪井孝光さんについても紹介させて頂きたいと思っております。卒業後、私が紹介したかもしれませんが、ソニーに入社されて立派な仕事をされ、ソニーの関連会社の監査役を最後に、その後は悠々自適の生活を送っておられま



倉本 様（左）と今井先生

す。本会の発足当時、誰も幹事をやらないのなら私がやります、とって発足当時からずっとこの会の幹事役を引き受けてくれています。

会では年一回の「懇親会」と、「会報」を年に二回、9月と3月に発行してきました。これらに関する実務の殆ど全てを、実は坪井さんがやってくれています。例えば、「会報」について言えば、最初の予定では、A4一枚表裏2頁くらいのもので良いから、と始めたのですが、平成14年(2002年)の9月末に発行した「会報第1号」は、予想に反して6頁にもなりました。その後発行された2号、3号も、さらにページ数が増える、という状況が続いています。

第10号には区切りのよい記念号として、いずれも通研OBの平賀さん、岡本さん、藤本さんをお願いしてご寄稿を頂いた、と言うようになってきたわけです。そしてまた、ご寄稿を頂いた方々は大変優れたご経歴をお持ちですので、懇親会にもお招きして、いろいろお話を伺おうということで、今日の会が実現した次第です。

なお、通研側メンバーとはいうと、いつも島田さんしか参加がないのですが、皆さんそれぞれに事情があって来られないのが残念です。詳細は省きますが、佐藤秀吉さんは初回の懇親会開催前に会場に顔を出されています。

前置きが長くなりましたが、この会の“生い立ち”などをご紹介させて頂き、会を始めるに当たってのご挨拶に替えさせていただきます。

2) 鈴木 威一 様 交詢社の歴史について

ただいま、今井先生より、過分なお言葉をいただき、大変恐縮です。

坪井幹事から、交詢社ではなぜこの暑い最中にもネクタイをしなければいけないのか説明せよ、と言われておりまして、それをどうも説明しないと先に進めないような気がいたしております。

実は一年ほど前にこの場所にて今井先生達数人で食事をしました。そのとき、今井先生から、一度ここで懇



親会をしてみてもどうかとご提案がありました。雰囲気が変わるし、東京駅から近いので地方から来る方にも便利ではないかと。そこで取りあえず一年も前ではありましたが場所を押さえました。しかしこのクラブの決まりでは三ヶ月前でなくては予約できないことになっていたのです。

また、今日は特別な日で、交詢社のメンバーとその家族だけが参加できる「夏の夜の音楽フェスティバル」が今夜開かれ、音楽会と会食が行われることになっており会場の準備のため昼間は誰も入れないことになっていました。予約の取り消しを迫られましたが、音楽会の方

が後に決まったこともあり何とか使わせていただけることになりました。そのようなことで今日は我々だけの貸し切りになっております。音楽会は5時からですが、準備のため3時には終らせて欲しいと言われておりますのでよろしく願いいたします。

ここ「交詢社」は日本最古の紳士クラブで、明治13年1月25日 芝・青松寺 という寺の中でまず集まりができたようでありまして、「知識を交換し、知らざるところの世務を諮詢して知るところを与うるのみ。誠に淡白にして無味無臭なり」ということを福沢諭吉が中国の言葉の中から取ってきたようです。この中の「交」と「詢」を取り、また・・・「社」というのは、当時 社中 とかいうのは小さい集まりを意味しており、それを使ったようで、「交詢社」と名命したようです。それ以来交詢社という名前を使っておりますが、会社ではございません。現在は公益法人として「公益事業を行う事」を目的とした財団法人になっております。

福沢諭吉は3回外遊をしております。海外を見た中で、この日本をどのようにしていったらよいか、ということ色々考えて、福沢がいくつかの手を打ったわけですが、後に評価をしている人が言っていることですが、福沢がやったことは三大事業に纏められると。

その第一が「慶応義塾大学」の創設で教育の重要性を感じたのと、二番目が「交詢社」です。当時専門家同士の集まりはありましたが、色んな業種の人が集まって意見を交換し、世の中を良くしようという場がなかった。これは多分イギリスのメンバーズクラブを見て感じたのではないかと思います。そこで交詢社を作った。今の言葉で言えば異業種交流ということになります。三番目は「時事通信社」を作ったことで、広く情報を取ることが重要であると。

これ等を考えると、今でも完全に通用することで、素晴らしい見識のある方であったのだと思いますが、時

事通信社は、今のような新聞社の特派員の居なかった時代では海外の情報は殆んど時事通信社と、「共同通信社」を通じて入ってきていたわけです。

交詢社は明治 13 年に出来ましたので 125 周年記念を二年前に行い、その記念行事としてこの建物を建て直したのです。耐震強度が問題でしたので、建物の中のもの一旦全部別の所に持っていき、建物を作り直してから、再び中のものを全部入れたのです。中がそのままになるように建物を作り直したので、普通のものより 2～3 倍建設費がかかったようです。そのようなことで、特にこの部屋は当時のそのままの雰囲気を残しております。

この話でびっくりするのは、創設当時のメンバー数が日本全国で 2,000 名弱であるのに対し、127 年目の現在 2,200 名であり、殆んど変わっていないということです。交詢社といいますと何か慶応義塾の同窓会かと思われがちですが、慶応の出身者が多いものそれは 4 割程度です。創設から 2 年後の明治 15 年の常務会では委員長選挙があり、その第 1 位の福沢諭吉が委員長になりましたが、第 2 位が大隈重信、第 3 位 後藤象二郎、第 4 位 中上川彦次郎、第 5 位 由利公正、第 6 位 犬養毅、ということになっております。選挙での一位と二位とは、十票差であったようでして、そのとき大隈重信が委員長になっていたら方向も大きく違っていたようにも思われ、歴史を見ると面白いことが分ります。

ここ交詢社の社員で総理大臣になられた方が 20 数名おられまして、大隈重信が一番先に政界入りし、伊藤博文がそれに続き、吉田茂、芦田均、鳩山一郎、岸信介、佐藤栄作、池田勇人、福田赳夫、大平正芳氏などです。

しかし最近はなるべく政治から距離を置くようにとの方針で、現職の閣僚はこのメンバーにはなれないような仕組みにしているようです。メンバーだった人が閣僚になった場合には一時休職ということになるかと思えます。ここでは政治と商売はやってはいけないことになっております。

格式を重んじる方達がメンバーで、その平均年齢は 75～76 歳ではないかと言われております。メンバーのなかにはネクタイや背広の規制をしなくともとか、女性のメンバーを、との声が時々ありますが何も変わってはおりません。交詢社はこのような歴史と、伝統を持つところがございます。

お礼が最後になって恐縮ですが、今回参加していただいている平賀様と岡本様からはご寄付をいただいております。どうもありがとうございました。

3) 平賀 貞太郎 様のご挨拶

今井卒研生の会には初めての参加です。今井さんとは昔からの知り合いで、学校も一緒です。私は一寸変わった経歴をもっており、会報に書いたようなことになった訳ですが、今日は別の話をしようと思えます。

数えて今年 88 歳ですが、いままでは第二の人生（40 歳で NTT をやめ、東京電気化学工業(株)：現 TDK に入り、7 年後には技術担当役員）をやってきたこととなります。そこで第三の人生は何をやろうかと。これからは趣味をやろうと思ひまして、陶芸と水墨画を続けています。近況報告（85～87 歳）を含め、まとめてきましたのでそれをご覧下さい。

近況報告 財団法人材料科学技術振興財団 平賀貞太郎（昭和 34 年 NTT 退職）

1. 家族・勤務先の状況など

妻と二人暮らし、終戦直後の結婚から六十余年、良くも悪くも耐えたものだと思つて苦笑するこの頃です。息子一家（孫男三人）は横浜在住・週一回の定期便（電話）で安否をチェックされ、さらに今年の母の日に、孫と同型のケイタイを贈られてオレオレ詐欺を注意されるなど、わが家もようやくボーダーレスの布陣に入ったところです。

現役時代（TDK 社）のご縁で、材料系の二つの財団に関係し、新材料の研究開発などに若干のお手伝いをしています。中には高度な分析、構造解析技術の部門もあり、異色財団として期待されています。

2. 健康状況など

毎朝近くの武蔵関公園を三周（約 4 キロ）四季折々の自然を満喫しています。そのせいか今のところ元気。先日も TDK のゴルフコンペに参加、健闘空しく BM 賞。誉められたのは 85 歳の年齢とやる気だけでした。

3. 趣味・ボランティア活動など

陶芸は 17 年、その絵付けが動機で始めた絵（水墨）は 12 年、そろそろ“継続は力なり”の恩恵にあずかれそうなものですがダメです。僅かに先年の NTT OB 展での受賞（陶芸）、全国公募展での入選受賞（絵）、そして NTT 病院での春秋 2 回のボランティア展示（色紙）など、かくてわが熟年余技の世界に